

の教義は僅かに今日に復活することになつたが、その昔同じ運命に迫られた漢譯の景教經典が、相携さへて同じ洞窟から這ひ出し、ことし新年の光を藝文の巻頭に迎へるに至つたのは、此の教の爲に祝し、學界の爲に賀せねばならぬ。

原本は英のスタイン氏や、佛のペリオ氏に無數の珍籍を供給した敦煌の千佛洞の一から出たもので、數十巻の佛典と共に、書賈の手によつて我が幸運なる富岡講師の書架を飾ることになつたものである、用紙は同じ場所から發見せられた多くの佛典に於て認むると同様なる黃麻紙で全體の行數四百五行に及び、書寫の年次は記されないが、曰ふ迄もなく唐代の寫本なることは明らかである、巻首は缺けて居るから分らないが、巻末に一神論卷第三とあるから、一神論といふのが此の巻の題號であると思はれる、殘巻は題名の知れない一章の殘部を以て初まり、次に喻第二の章、一天論第一世尊布施論第三の章に區別せられて居るが、要するに題名の如く宇宙萬物は一神の創造し、一神の主宰する所なることを述べたもので、試みに殘巻の初めの所を抄出して見れば、「以此故知、一切萬物並是一神所作、可見者、不可見者、並是一神所造、之時當今現見一神所造之物、故能安天立地、至今不變、天無柱支託、若非一神所爲、何因而得久立、不從上落、此乃一神術妙之力、若不一神所爲、誰能永久住持不落」と論じたるが如きである。

巻首に寫眞して掲げた一節は馬太傳第六章第二節以下に相當する所を引いたものであつて有名なる山上の垂訓の一節である、但だ此の譯文は唐代の一種の俗語體とでもいふのか、非常に解釋し難い書き方であるから、自分の如き漢文の素養の乏しいものには意味の曉り切れない所が多い、細かき研究の發表は後日を期することとして、こゝ